

くらし

ミツバチを飼いたい

①

あんなに嫌いだった蜂に魅せられるとは。この春岐阜県に赴任するまで想像していなかった。

少年時代、隣の三重県の間

部で育った。夏の楽し

みはクワガタやカブトムシを捕まえることだ

った。友達と里山へ入

ったものだが、宝物が

めったになく、やっか

いな虫を怒らせること

が多かった。地元の方

言で「オンブク」と呼

んだスズメバチだ。ク

ヌギの木を蹴ると、黄

色と黒の体が軍用ヘリ

のように向かってきた。「オン

ブクやあノ」。子どもたちは林

の中を追い回された。

子に刺された。ひどく痛く大泣きした記憶がある。以来「蜂は怖い虫」と思い続けてきた。転機は意外な形で訪れた。ある記者会見で、岐阜市に本社のあるハチミツ製造会社、秋田屋本店の中村正社長(65)とお会いした。同社は1804年の創業で中村さんは9代目。老舗企業の重々しさを感ぜせない気さくな人柄で「いつでも我が社を訪ねてください」という。さわやかな笑顔に誘われて、8月に同社を訪れることになった。

学・験・体

案内されたのは、岐阜市南部にある「城南事業所」。執行役員で養蜂部長の後藤真人所長



ミツバチがひたむきに働く姿に魅了された(岐阜市)

少年時代、刺され「蜂は怖い」

巣箱を見学、けなげさに感動

けた帽子を身につけた。刺されることはなさそうだが、見知らぬ訪問者に蜂が押し寄せないか、不安を抱えつつ巣箱に近づいた。巣箱の中では無数のミツバチがうごめいていた。

「安心してください。人には近寄りませんか

に。後藤さんの声が横から響いた。確かに人間に向かってくる蜂は1匹もない。それぞれ、せせせと働いていた。働きバチは時々、組織の中で黙々と仕事する人々の比喩として使われる。だが目の前のミツバチに悲

壮感はなく、ひたむきでけなげだ。六角形の巣穴の上で、大勢

が力を合わせている様子も伝わってきた。背中に生えた毛も柔らかそう、指で触りたくな

た。私の思いを感じ取ったのだろう。後藤さんは「蜂ってかわいいでしょ」とほほ笑んだ。

職場に戻っても蜂のことが忘れられない。中村社長が「多くの人に蜂を飼ってもらいたいですよ」と話していたことも耳に残った。

私は思い切って電話した。「短い間でいいです。巣箱を貸し

てくれませんか。蜂を飼いたいです」。むちゃな願いに後藤さんは冷静に答えた。「巣箱を置くには役所届けが必要なんです。我が社の養蜂場で蜂の世話をしませんか。ありがたい言葉に甘えることにした。

(この連載は小山隆司(49)が担当します)

私は...

岐阜城がそびえる金華山に近い支局で蜂を飼うつもりだった。付近に花の咲く公園もあり理論上は可能らしい。